わが師を語る Part 2

古都金沢の恩師たちから授かった知と技のハーモニー

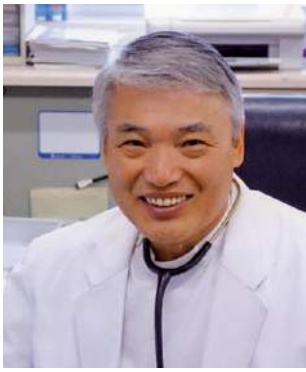
岡井高先生
岡井内科医院
静岡県浜松市東区積志町一〇八

郷里の浜松で開業してはや十二年になる。消化器内科が専門だが、患者さんの七割は高血圧・糖尿病・脂質異常症などの生活習慣病が占めている。大学勤務時代は、正直扇子代わりにしかならなかった「〇〇治療ガイドライン」という病気説明用の下敷きも、今では大切な診療用グッズであり、疾患別に整理して保管している。

さて、私の臨床医としての礎は、卒後六年間、総合内科学教室である金沢大学第一内科在籍中に形成されたものであり、諸先輩から受けた薫陶に心より感謝している。教授回診後の患者プレゼンテーション、各研究室の症例検討会、そして剖検例の臨床病理検討会などでは、主治医そっちのけで講師や助手の先生方が白熱した議論を交わしていたのが印象的で、学問に対する基本姿勢や方法論を学ぶ絶好の機会になった。また、出張病院の先生方も皆、「教えてやるぞ」と手ぐすねを引いて待ち構えていた。薬の安全な使い方や匙加減、患者さんを診るには十分な知識と技術が必要、患者さんを救うためには問題点を徹底的に追求し解明することが大切、そして日々の診療で得たデータを整理し保存することが知的財産になるなど、大変多くのことを教えて頂いた。また研究面では、加登康洋講師（写真1）から人間愛にあふれる指導を受け、当時夢の薬として注目されたインターフェロンの肝がん培養細胞株に対する抗腫瘍効果を検討した。初めての学会発表では、抄録原稿の作成から講演原稿の作成まで手取り足取り教えて頂き、何回も推敲を重ねさせられた。そして最終的には、自分の書いた草案は原形を留めず極めて簡潔明瞭な原稿に纏まっていた。この文章作成スキルは、その後の論文作成は勿論、現在のカルテ記載、紹介状作成などあらゆる面で生かされている。

写真1：第2研究室（肝臓グループ）の加登康洋先生（中央、現小松ソフィア病院理事長）、鵜浦雅志先生（左、現国立病院機構金沢医療センター院長）と（1995年）

七年目以降は、澤武紀雄教授（写真2～4）が主宰する金沢大学がん研究所内科時代になる。赴任早々、教授の予算要求が実を結び、我が国初となる超音波内視鏡診断装置が導入された。私のがん研内科での



筆者近影

二十年は、正にこの超音波内視鏡と共に歩んだ二十年である。研究には文部省招聘の国費留学生二人にも参加してもらった。当初は胃がんなどの消化管疾患に関する研究が主体だったが、とにかく長い目で温かく見守って頂いた。そして、何年目かに、ようやく先生のご専門である膵癌を対象とした英文を纏め上げたとき、キラキラとした目で、「これを待っていたのだよ」と興奮気味に話されたときのお顔が今でも忘れられない。先生には、海釣りの楽しさも教えて頂いた。釣り上げた瞬間、赤い斑点がキラキラ光る赤イカ釣り。この斑点はピロリ菌未感染者の胃粘膜にも似ており、患者さんの検査結果説明に利用している。また先生は粘りと根性の持ち主で、船頭が港に戻るべく、「ハイ皆竿を上げて」と声掛けしてもすぐには上げず、最終的に岸壁近くに戻ったところでタコを釣り上げたりして、最後まで楽しんでおられた。この釣り好きのＤＮＡは私の長男に受け継がれ、彼はアメリカ留学中の先輩宅を訪れた時、近くの港で釣りに没頭するあまり夕食時間に間に合わなかったという兵である。

このように自然と歴史・文化が融合する街金沢で体験させて頂いた掛け替えのない経験は、現在の自分の誇りでもあり、日常診療における「ＥＢＭ」実践の原動力でもある。何回感謝しても感謝し過ぎることはないであろう。

写真2：がん研究所澤武紀雄教授（中央）、トルコ人国費留学生ソンギュール先生ご一家と（1994年）

写真3：澤武教授、エジプト人国費留学生サベット先生らと（2002年）

写真4：澤武教授、金子周一先生（現金沢大学第1内科教授、中央演壇）らと（2003年）